伝文

日本口承文芸学会　会報
第69号　2021年9月 発行
日本口承文芸学会
〒182-8525　東京都調布市緑ヶ丘1－25
白百合女子大学人間総合学部　間宮史子研究室
Tel：03-3326-5144（内線1207）
Fax: 03-3326-1319（児童文化研究センター）
E-mail: info@ko-sho.org

口承文芸研究の現代的課題

中川　裕

立石展大さんの後を継ぎ、4月より日本口承文芸学会の会長をお引き受けすることになりました中川裕です。2021年3月まで千葉大学の教員でしたが、定年退職して現在常勤職にはついておりません。3月の理事会で会長にというご推薦をいただいた時に、本来なら任ではないということで辞退すべきところでしたが、皆さんお忙しい中で会長や委員長職を引き受けてこられている中で、退職した私があまり我儘を言ってもいけないだろうということで、浅学ながらお引き受けした次第です。

ただ、私の専門はアイヌ語・アイヌ口承文芸で、それ以外の領域についてあまり知識がありません。本学会で取り上げられているさまざまな分野全体に広く目配りができるかどうかは、はなはだ心もとないところですので、事務局を始め各委員会の皆様、そして会員の皆様から全面的にお力を借りたいと思います。

さて、自分の狭い専門領域に限った話しかできませんが、現代における口承文芸の研究課題ということについて一言申し上げます。今、多くの若い人たちが、アイヌ語と、アイヌ語による口承文芸の復興という課題に取り組んでいます。一例を挙げると、2020年度に北海道白老町にウポポイ「民族共生象徴空間」が設立されましたが、その運営母体であるアイヌ民族文化財団のホームページ（https://www.ff-ainu.or.jp/）上に、「アイヌ語動画講座」というコーナーが開設されました。この中には「口承文芸」という項目があり、アイヌ語の歌や物語を、子供たちにもアピールできるように紙芝居仕立てにして演じられています。演じているのは財団の若いアイヌのスタッフです。

このような活動は他にもさまざまな形で行われているのですが、基本的に過去の語り手の演じたものを丸暗記して語られています。演じるたびに即興で表現が変わり、しかも形式的にも内容的にも本質部分はゆらがないという、かつての語り方で演じられる人はまれにしかおりません。私は、今後この即興のメカニズムというものを明らかにすることによって、アイヌ口承文芸の復興に寄与することができると思っています。

アイヌ語に関しては、もはや語り手からそれを直接学ぶことはできませんが、新たな音声資料や聞き取りの資料は現在でも次々に見つかっており、その分析が待たれている状態です。このように「死語」とみなされる状態にあるアイヌ語の口承文芸においても課題は山積みであり、その責務は大きなものであると感じております。

口承文芸の未来に向けて本学会を新たな探求の場とすべく、微力ながら尽力していきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。（千葉県）

第79回研究例会報告　2021年3月13日（土）　**「東日本と西日本の西行伝承」**　ZOOMにて

佐藤　優（岩手県）

新型コロナウイルス感染症の影響で１年延期されていた「東日本と西日本の西行伝承」は、2021 年３月 13 日（土）に第 79 回研究例会としてオンライン会議形式で開催された。パネリストは、西行伝承研究で優れた業績をお持ちの松本孝三氏と小堀光夫氏が務められた。

最初の報告は松本氏による「「西行と熱田宮」「西行と亀」「いちご問答」などをめぐって」であった。報告では、研究史を概観したのち、「西行と熱田宮」「西行と亀」「いちご問答」という視点で分析を進めた。松本氏は、西行伝承を一言でとらえるなら「笑いを求める世界」だとする。さらに、「西行と熱田宮」の分析では、この話は、「東」と「西」にこだわる傾向があることを指摘した上で、近世の小咄でよく出てくる「無理問答」の形式も備えていると述べる。また、「木遣歌」や「地搗歌」にも「西行と熱田宮」を内容として持つ事例が見られる背景として、大工や木挽きの技術を持つ渡り職人を東日本では「サイギョウ」ということから、「サイギョウ」が「西行」をいざなう形で伝承が広まったと考察した。「西行と亀」では、東西の大きな差異は認められないと指摘した。そして、この話に出てくる歌は「萩にはね糞これが初なり」という下の句がほぼ全ての事例に認められることについて「糞」は一つの語りの場の区切りとし、「初なり」が新しい場の初めに誘う効果があると指摘した。「いちご問答」では、この話が東北と中国地方のみで伝承されていると指摘し、この話が「西行と熱田宮」と同じく「無理問答」の形式を備えている事例が多いことから、言葉遊びを楽しむ話であるとした。最後に、考察した３つの話は、いずれも言葉遊びの要素が多いことから、これらの話は、諧謔を弄することをなりわいとした連歌師や俳諧師が、伝承に深く関与したのではないかと結論づけた。

小堀氏の報告は、「東北地方の西行伝承「阿漕」と、「泡子」の話をめぐって」であった。小堀氏は、西行伝承に着目した場合、文献と伝承双方に目配りする姿勢が求められる。だが、文学研究者と口承文芸研究者は、前者が、文献だけを研究対象とし、後者が伝承世界だけを取り上げているという強い問題意識を議論の前提としていた。

さて、発表の内容は、西行伝承の中で「阿漕」と「泡子」の話について、東西の地域的特徴などを取り上げ、分析をおこなった。具体的には、「泡子」話の伝承地９事例中４例は西日本に、残り５例が東日本とりわけ東北地方に多く伝承されていることを指摘した。「阿漕」話の事例５例については、広島県安芸高田市の事例を除き他の４例は、福島県と宮城県に事例が見られることを析出された。さらに、話の特徴も詳細に検討がおこなわれた。例えば、「阿漕」伝承についてみてみると、西日本では、『古今和歌六帖』第３の「あふことをあときのしまにひくたひのたびかさならば人もしりなん」（１５２１）に端を発する和歌世界の関わりが顕著に看取できるのに対し、東日本ではまとまった頓智話や謎かけ話として伝わっていることを指摘した。また、「泡子」話の伝承に関しては、聖や旅の宗教者がこの話の伝播に関与したと推断した。

西行話の多くが和歌の修辞に基づく笑いが多い。よって、松本氏も指摘した俳諧連歌を嗜好する地方文人が、こうした話の享受層として推定でき、話の展開にも深く関与したのではないかなど活発な意見交換がなされた。

第４５回日本口承文芸学会大会・報告

【公開講演】　2021年6月9日　（土）ZOOMにて

渡邉　浩司氏「妖精モルガーヌと妖精メリュジーヌ　―ケルトの大女神（だいじょしん）の化身たち―」

加藤　耕義（東京都）

中世フランス文学および、アーサー王物語の研究者の視点から、中世ヨーロッパの代表的な2妖精、妖精モルガーヌと妖精メリュジーヌについて論じた詳細でたいへん興味深い講演であった。

妖精モルガーヌは、「アーサー王物語」に登場する。モルガーヌは、アーサー王が最後の合戦で瀕死の重傷を負ったとき、船でアーサー王をアヴァロン島へ運んで治療する妖精である。勇者に対し愛と憎しみの両方を示す両義的な存在であるという。

一方妖精メリュジーヌはリュジニャン家の始祖妖精である。騎士レイモンダンは森でメリュジーヌと出会い、結婚する。結婚後レイモンダンは、兄にそそのかされて見るなの禁忌を破り、下半身蛇身のメリュジーヌの姿を見る。レイモンダンはそのことを口にせず、ふたりはいっしょに暮らし続けるが、後にレイモンダンが皆の前で彼女を蛇呼ばわりすると、メリュジーヌは子どもたちを残し去っていく。母性的な妖精であるという。

この2妖精は一見とても性格が異なっているが、次の最古の文献を比べると、共通点が見えると渡邉氏は指摘する。『マーリン伝』（1150年頃）ではモルゲン（＝モルガーヌ）は9人姉妹で、Mで始まる名前が３つ、Gで始まる名前が3つ、Tで始まる名前が3つである。フィリップ・ヴァルテールは、9人というのは長女モルゲンが3重化を2回繰り返した姿と考えている。一方ジャン・ダラスの『メリュジーヌ物語』（1393年頃）ではメリュジーヌは3姉妹であり、ヴァルテールによると、メリュジーヌの名前には、ふたりの妹の名前の一部が含まれている。この点から、モルガーヌもメリュジーヌもそのモデルは三者一組の姿を取るケルトの大女神と考えられるのではないかと渡邉氏はいう。

というのも、中世の「島のケルト」にはもともと一柱でありながら3重化していく三者一組の女神の物語が多く残っていると渡邉氏は指摘する。そして妖精モルガーヌのモデルの候補は、『コルマクの語彙集』（900年頃）にも言及されている戦闘女神のモリーガンだという。モリーガンには２人の姉妹がいて、この３姉妹はしばしば同一視されている。こうした島のケルトの神話物語に残る元来一柱の女神が3重化する姿が、モルガーヌとメリュジーヌのひな形と考えられるという指摘は説得力がある。

さらに、大陸のケルト（紀元前50年–紀元5世紀くらい）にも、伝承こそ残っていないもののガリア全域から三人の女神をかたどった彫像が多く見つかっているといい、図像が示された。

モルガーヌとメリュジーヌにはさらに共通点があるという。いずれも鳥への変身能力があり、異界との繋がりが強い妖精である。さらにモルガーヌはアヴァロンの島の女王であり、メリュジーヌは二人の妹といっしょに15歳になるまで、アヴァロンの島で育てられた。さまざまな共通性を考えると、この二人の妖精というのは、同一の存在という可能性さえ出てくるという指摘とともに講演は閉じられた。

娘たちを非難するプレジーヌ
（Jean d'Arras, Ars ms fr 3353, f 14v）

三浦佑之氏「出雲神話の女神たち」

中川　裕（千葉県）

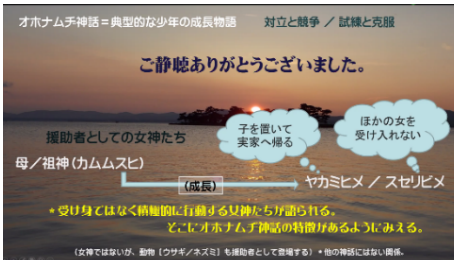
本講演は古事記・出雲風土記に基づき、オオナムヂ神話に登場するヤカミヒメ、オオナムヂの母神、カムムスヒ、キサカヒヒメ、ウムカヒヒメ、スセリビメという女神たちに焦点を当てたものである。

オオナムヂ（オホクニヌシノミコト）はワニに皮を剥かれたウサギを治療し、ヤカミヒメが妻になることを託宣される。それをうらんだ八十人の兄たちによって彼は殺されるが、母神が天のカムムスヒに助けを求め、遣わされたキサカヒヒメとウムカヒヒメの力によって生き返る。兄たちの手を逃れ、根堅州国のスサノヲの元にたどり着いたオオナムヂはスナノヲの娘のスセリビメと深い仲になり、彼女の援助によってスサノヲに課された試練を果たし、宝物を奪い彼女を連れて逃げ出す。スサノヲはその宝物を使って葦原中国を統べ治めるよう呼びかけ、その言葉どおり彼は兄たちを追い払って国を統治する。

カムムスヒはアメノミナカヌシ、タカミムスヒとともに、高天原に最初に成り出た三柱の神のひとつであり、タカミムスヒがアマテラスと融合して政治・国家と結びつけられたのに対し、カムムスヒは母神的存在として出雲世界と結びつけられる。オオナムヂの母はタカミムスヒに母神的な生成力を求め、貝の女神である二神の出した粉と汁に母親の乳を混ぜたものを塗ることによってオオナムヂを生き返らせる。

カムムスヒはまた、スサノヲが殺したオオゲツヒメの体から生まれた作物を浄化する。スナノヲはそれを地上にもたらし、それが霊妙な稲田の女神であるクシナダヒメとの婚姻につながる。スナノヲの住む根堅州国は海と結びつけられた世界だが、カムムスヒもまた二人の貝の女神の母親ということで海と関連し、カムムスヒの息子とされ、オホクニヌシの国作りを助けるスクナビコナもガガイモの舟に乗って海から現れ、粟柄にはじかれて水平線のかなたの常世国に飛ばされる。高天原―葦原中国―黄泉国を結ぶ天皇／弥生的な垂直的世界観が父系的であるのに対し、カムムスヒの絡む根堅州国・常世国は南方的な水平的世界観を成し、古層／縄文的な母系的な世界として解釈される。

またオオナムヂの二人の妻については、正妻である妻スセリビメの嫉妬を嫌ったヤカミヒメが故郷へ去るという結末だが、三浦氏はそれを援助者である二人の女性の、母から妻への役割交代と考え、主人公の成長物語として解釈する。そしてそれも含めて「受け身ではなく積極的に行動する女神たちが語られる。そこにオホナムヂ神話の特徴があるようにみえる」とまとめている。



いつもながら、古事記・風土記の世界をきわめて大胆に、かつ説得力のある語り方で解体・再構成してくれた、楽しい講演であった。

小澤　俊夫氏「昔話の再話についての検討」

加藤　耕義（東京都）

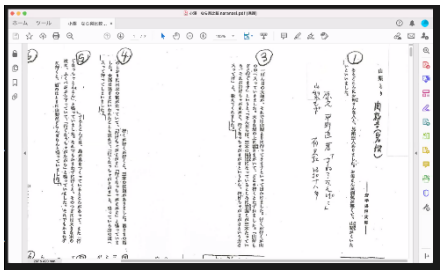
小澤氏による講演は、「もう伝承的な語り手というのは、ほとんどいない」という現状の指摘から始まった。かつて伝承的な語り手がいたころには、小澤氏も学会メンバーも、田舎に行って語り手からお話を

聞き、録音し、それを忠実に翻字して、本にして発表したが、現在では口承はほとんど絶えている。一方で子どもたちに昔話を聞かせることが大事だと認識している親はたくさんおり、そういう人たちは本で読んでお話を覚えて語っている。ところが現在「昔話」や「民話」として発表されているものの多くが、口伝えの昔話とは違った文体になっており、手が加えられて児童文学的になっていることを小澤氏は問題視している。現代の語り手が元とする本がおかしな文章を伝えていったら、日本の昔話は本当に消えてしまうという危機感である。

そうした問題の具体例として、平野直『すねこ・たんぱこ』に収められている「やまなしもぎ」を元にした5つの再話の比較が行われた。関敬吾「山梨とり」（『日本の昔ばなし』岩波文庫）、東京子ども図書館編「なら梨とり」（『おはなしのろうそく』）、稲田浩二他「なら梨とり」（『日本昔話百選』三省堂）、木下順二「なら梨とり」（『わらしべ長者』岩波書店）、松谷みよ子「なら梨とり」（『日本の昔話』講談社文庫）、5編の再話比較である。このうち特に問題として指摘されたのは、木下順二氏の再話と松谷みよ子氏の再話である。

マックス・リュティの口承文芸理論を日本に紹介し、その理論に基づき日本の昔話の分析的研究を重ねてきた小澤氏は、木下氏、松谷氏の再話で昔話の文体を逸脱している箇所を具体的に指摘した。一例を挙げる。平野氏の元の版では、三郎は婆さまに教えられたとおり、笹葉こが「行げちゃがさがさ」という方に進み、なら梨を見つける。一方木下順二氏はこれを変え、婆さまは「行くなっちゃガサガサ」と鳴ってるほうへ行けと教える。三郎は、ばあさんはああいったが、でもこのかわいらしい笹っ葉コのいい音のほうが正しいようだといってそちらに行き、なら梨を見つける。美しいものが正しいというこの木下氏の審美主義的文学観に基づく書き換えについて小澤氏は、創作なら構わないが、「なら梨とり」というタイトルをそのまま使い書き換えることは、我々の先祖である普通の人たちの間で綿々と語り伝えられてきた昔話を壊していることになる、日本の昔話をすげ替えることになる、と厳しく批判した。

小澤氏は、「昔話はもうほとんど『口承文芸』でなくなり、『書承文芸』となっており、だからこそ、その『書』が大事である。我々の学会でも昔話の専門家として、そこに目を向けなければいけない。そこに発言していかなければいけないと思う」という提言で講演を閉じた。



【研究発表報告】６月６日（日）　第1部

小堀　光夫（埼玉県）

鈴木麻位子氏「千葉県東金市の雄蛇ヶ池にまつわる伝承－大蛇伝説・オオマリコケムシの話を中心に－」は、農業用水を確保するため、江戸時代に人工的に造られた溜池にまつわる伝承を考察したものである。雄蛇ヶ池の伝承は、山の水源地の池と雨乞いをめぐる水神伝説とは異なる。雄蛇ヶ池は人工の溜池であると来歴がはっきりしているからである。つまり鈴木氏の研究は、海底火山の噴火で出来たばかりの島が、その後どのような植物や動物がそこに発生するのかを調査する生物学の研究に似ている。鈴木氏は雄蛇ヶ池にまつわる伝承として大蛇伝説をとりあげ、特に「池を七回半まわると大蛇が出る」という伝承に注目する。そしてものの周囲を回ると何かが出るという伝承は、全国各地にあり雄蛇ヶ池独自のものでは

ないことや、中山太郎、折口信夫、鈴木棠三による「信仰」や「説話」を説く先行研究を紹介している。その一方で鈴木氏は、雄蛇ヶ池の伝承は「ものの周囲を回る」という行動が話者の子どもの頃の体験としてあり、それが現在の大蛇伝承につながっていることを指摘する。また鈴木氏は、雄蛇ヶ池で1981年頃、アメリカ原産の外来生物「オオマリコケムシ」の大量発生を目撃した地域住民の話についても触れている。そして新聞等のメディアにも取り上げられた「オオマリコケムシ」をめぐる話の展開を考察している。雄蛇ヶ池という人工の溜池をめぐる新しい話の発生とその展開を研究する鈴木氏の今後に期待したい。

玉水洋匡氏「松尾芭蕉誤伝句の在地伝承化と句碑建立ー現存する芭蕉誤伝句句碑を基にしてー」は、松尾芭蕉の句と伝承される他の人物が詠んだ句が刻まれた芭蕉伝承句碑建立の背景を考察した発表である。玉水氏は、松尾芭蕉の伝承句（誤伝句）を、A『石に刻まれた芭蕉』、B『全国文学碑総覧』といった書籍や、C 現地調査、D 句碑建立の新聞記事から38例を抽出し、①所在地、②建立地、③名、④句、⑤建立年、⑥建立者、⑦元の作者、⑧検索方法といった観点から考察している。①所在地は、関東・甲信越地方に多く建立され、②建立地は、俳人集団の受け皿としての寺社が多いこと。中でも④句、⑥建立者、⑦元の作者の調べを進めることが、松尾芭蕉の伝承句と句碑建立の背景を調べる上で重要と考える。本発表では特に、玉水氏が現地調査した埼玉県熊谷市弥藤吾に縁のある俳人、桜井梅室の句が芭蕉伝承句となった事例、神奈川県横須賀市東浦賀町にゆかりのある俳人、福井貞斎が建立した北村湖春の句が芭蕉伝承句となった事例、山梨県甲州市勝沼町では、松木蓮之の句が芭蕉伝承句となった事例と、それぞれの芭蕉伝承句碑建立の背景が考察されている。いずれも寺社に建立され、地域の俳人集団が伝承句の成立に関わっていたことが指摘されている。一方、同様の研究テーマは、西行伝承の研究にも見られる。玉水氏による西行の伝承歌と松尾芭蕉伝承句をめぐる比較研究を待ちたい。

冨樫晃氏「小浜発八百比丘尼伝説の伝播ー空印寺と神明宮の異なる伝播と各地伝承への影響ー」は、八百比丘尼伝説の中心地、若狭小浜において近世後期、新興勢力の寺社である空印寺と神明宮が、それぞれ異なる八百比丘尼伝説を使った方法でおこなった格式保持のための勧進活動と、各地の八百比丘尼伝説への影響を考察した発表である。冨樫氏は、空印寺と神明宮の八百比丘尼伝説は同一のものではなく、両者が伝説の摺り合わせをおこない、それぞれの勧進活動に合わせた内容になっていると指摘する。具体的には空印寺は寺院内の八百比丘尼が入定した巌窟への参詣を促すために各地に八百比丘尼の生家と称する家を配置し、そこを拠点として勧進活動をおこなった。一方、神明宮は、八百比丘尼の生家である若狭の高橋長者という伝承を手放し、新たな八百比丘尼像と略縁起を製作、出開帳を積極的におこなった結果、各地に八百比丘尼伝説が生成したとする。小浜藩の財政難にともなっておこなった格式保持のための空印寺と神明宮の勧進活動が、各地にその土地に合った八百比丘尼伝説を生み出したと考察した。今後の研究課題としては、各地の八百比丘尼伝説を使った出開帳記録の発掘が待たれる。

第２部

藤井　真湖（愛知県）

蒙古貞夫「モンゴルの口承文芸ホーリンウリゲルの語り方に関する考察」

蒙古貞夫氏のご出身は遼寧省の阜新モンゴル族自治県である。ご発表は氏の出身地域で盛んな南（内）モンゴルの芸能ジャンルの一つであるホーリンウリゲル（四胡の物語）の紹介であった（節の実演も有

り）。
当該ジャンルについての日本での研究はほぼ未開拓状態であるので、本ジャンルのご紹介は大変貴重なものであった。日本でこのジャンルの研究が進まない理由の一つは、用いられる語彙がモンゴル文字（ウイグル式蒙古文字）で書かれていても原語が漢語であるものが多く含まれているため、漢語に精通していなければモンゴル文字から漢語を再構成することができないところにある。実はモンゴル語にしても、方言が多用されているので難しい。というわけで、言語的に難しい側面が多々ある。言語以外にも、歴史や文化の知識も大いに必要となるジャンルである。
氏は日本でも比較的よく知られているチンギス・カンにまつわる物語である『モンゴル秘史』を事例にこのジャンルの解説をされたのであるが、質疑応答の際に、実はこの物語は当該地域ではポピュラーなものではないことが図らずも判明した。一口にモンゴルとはいうが、モンゴル人の居住地域は広範囲に渡っており、地域間の文化的差異も小さくはない。それゆえ、今後は“多様なるモンゴル”という視座のもとに東部モンゴル地域の当該ジャンルに焦点を当てる研究のほうがモンゴル研究全般に資するように思われる。ご研究の進展に期待したい。

安田千夏「アイヌロ承文芸にみるキツネ神の色」

安田千夏氏は北海道の先住民アイヌの動植物観を自らも作業に関わっておられるアーカイブ資料を含む各種資料を用いながら考察されてきた研究者である。今回のご発表はご論文「アイヌロ承文芸（散文説話）にみる神の衣装表現について」（2021）の紹介とその延長にある考察であったといえる。
黒キツネ神を指すアイヌ語は、situmpe,kunne sumari,kunne cironnupなどの言い方があるが、興味深いのは、人々の黒キツネ神への信仰心が、当該動物神の“善悪”にではなく、その“威力の強さ”に依拠していたらしいことである。さらに、黒キツネ神と一見対になっている白キツネ神というのは日本語でいえば“雪・キツネ”と表現されており、冬に毛色が白に変わるエゾオコジョを指していたらしい。氏はそれを示す幾つかの例を挙げられた。これは白キツネ神が日本文化の影響によるものと考える説への異論となりそうなご指摘といえる。
神という超越的存在をどのように表象するかを、氏は色という具象的説明と抽象的説明のそれぞれの有無という軸で４つのタイプを抽出された。そして、織田ステノ、川上まつ子、上田トシという三人の伝承者の語りを対象に、各々の伝承者で各タイプが占める比率を円グラフで示された。残念なのは、その比率がどのような母数に対してであるのかが良く分からなかった点である。氏の類型化の試みは伝承者の語りの特徴（癖）を示している点で興味深い。それゆえ、この点を今後の研究で補足していただけると嬉しい。

第3部

飯倉　義之（東京都）

藤井倫明「坪田譲治の「タニシ」」は、児童文学者・坪田譲治の再話活動を再検討する発表であった。藤井氏はすでに「童話化された昔話」（『口承文芸研究』42、2019）において、坪田は戦前の早い時期から、柳田國男ら民俗学者が収集した民俗学的な昔話資料を基として再話＝童話化を行っていることを指摘している。本発表は、その坪田の再話童話の集大成である『新百選日本むかしばなし』（新潮社、1957）において原典が不明な「タニシ」に注目し、比較的参照が容易である資料を原典としていた坪田が、なぜ原典がたどれない「タニシ」を再話の材料として選び取ったのかについて、坪田の著作以降の資料である

松岡利夫『周防・長門の民話』二（未来社、1969）の資料と比較しつつ論じた。

再話「タニシ」の典拠については確定することはできなかったが、坪田の「民俗学的な報告を基として児童文学として再構成する」という再話への姿勢や、坪田の持つ民話観の一端が明らかとなったと感じられた。坪田の再話姿勢や民話を明らかにすることは、坪田から松谷みよ子へと受け継がれる「民話の再話」と、その根底にある「民話運動」について、さらに考えを深めるための重要な手掛かりとなると感じた。

フロアからは「タニシ」が中国の古典説話に遡り得ることや、未来社の「日本の民話」シリーズが再話のみならず創作をも含有している危うさについて指摘があった。

佐藤喜久一郎「「学校の怪談」の記憶とそのリアリティ―「先生が教えてくれた話」をめぐって―」は、「学校の怪談」の伝承を主題とした発表である。

佐藤氏は勤務先で受講者に、学校の怪談を誰から聴いたかをアンケートした。結果「友達」や「先輩」と共に、少なくない数が「教師」と回答した。怪談の伝承経路として教員はさして珍しくない。だが発表者は、短大の付属高校からの進学者が、怪談の語り手として多く「Ｓ先生」を名指ししていることに注目した。報告者は「Ｓ先生」に直接聴き取りを行い、教員が「学校の怪談」をどのように理解し、どのように語っているのかについてまとめ、そこから教員が学校の怪談を語ることの意味について考察を広げていた。

これまで「学校の怪談」については、児童・生徒たちへのアンケート的な資料からのみ論じられてきた。しかし学校という場では、教員が児童・生徒たちへ怪談を伝える重要な役割があることにも早くから注目されていた。本発表は、本格的に行われた「学校の怪談の伝承者／伝播者としての教員」へのアプローチであり、とても重要な試みといえる。コミュニケーションとしての怪談、年長者からの教訓としての怪談など、「学校の怪談」を離れ、怪談という談話の意味をも再考する糸口になるとも感じられた。

シンポジウム報告「神話と昔話―女性神をめぐって―」

間宮　史子（神奈川県）

神話や昔話には、産みだす母神としての女性神のみでなく、さまざまな女性神があらわれる。このシンポジウムは、各文化圏の神話や昔話にあらわれる「女性神」「女性神的なもの」の姿、機能、力について、また、それを人々はどうとらえてきたのかを、パネリスト各氏に報告してもらい、各文化圏における「女性神」の特徴、共通点や相違点に迫りたいと企画したのだった。

北原モコットゥナシ氏の「アイヌの火神はなぜ老婆なのか」によると、アイヌの祭神の多くは女神だといわれ、そのうち火神は特に重要な地位にあるという。紹介された伝承によると、火神は、飢饉のとき地の果ての沼で魚を取り国中に投げ与える、夫が水の女神にたぶらかされると、水の女神と争う、ゴザ編みの最中に人間の女が危篤だという知らせがくると、墓場から魂を入手して蘇生させる。火神は能動的で、豊穣や生死と関わることがわかる。一方で、北海道東部では、西部で女神とされている神格が、夫婦の神とされているという。神の性別は確定的なものではなく、神の性別と祭祀上の慣習が結びつけられたのではないかと考える北原氏は、「神話における女神像は、神話を必要とし、生み出してきた人々の要請に沿って変容した」という松村一男の説を引きつつ、アイヌの重要な祭神が女神であることも、祭祀者が男性であることによるのではないかとする。

沖田瑞穂氏の報告は「『マハーバーラタ』におけるマーダヴィーに見る少女と母の一体性について」。マーダヴィーは四人の王と次々に結婚して、ひとりずつ息子を儲ける。彼女は「四つの家系を確立させる者」であり、「子を生むたびに処女に戻るという恩寵を授かっている」。前者については、ケルト神話の王権女神との共通点から、マーダヴィーが四つの王権の存続を助けたことが示される。後者の「少女・処女」と「母」を行き来する性質については、ギリシア神話のデメテルとコレ＝ペルセポネの話と比較することで、少女と母の一体性がマーダヴィーにもみられるとする。沖田氏はさらに、このような神話的思考は現代にも引き継がれているとし、宮崎駿のアニメーション作品『ハウルの動く城』を挙げ、少女と老女を行き来する主人公ソフィーに、マーダヴィーやデメテルとコレにみられる「女性における時間の還流とその永続性」が再現されているとする。

坂井弘紀氏は「中央ユーラシアの女神・女戦士」において、テュルク系諸民族の神話・英雄叙事詩に登場する女神や女戦士を紹介する。アルタイ、カザフの神話における「最初の女」エジ、ハワはイヴにあたる。マニ教を通じたセム系神話の影響だと考えられるという。女神ウマイはテングリ（天空神）の妻とみなされ、天界の女フマイはバシュコルトの英雄叙事詩『ウラル・バトゥル』の主人公の妻で白鳥にもなる。カザフの伝承では、ウマイとフマイが鳥の姿で飛来し、人間に火をもたらす。ウズベクの『アイスルウ』でイランと戦うトゥラン国の女王アイスルウ、また、カラカルパクの『40 人の乙女』で 40 人の乙女を率いて侵略者と戦う女戦士グライムは恰好いい。それぞれ、女性が主人公として語られている。坂井氏によると、騎馬遊牧民族は基本的に父系制ゆえ、女性が女王として君臨することはないというから、女王・女戦士は理想像として捉えられるという。

全体討論では、このテーマの拡がりが示された。火と女性、灰と聖性、灰の豊穣性、乙女・処女は成人しているが未婚の女性＝境界の女性、異界へ誘う女性、水辺に出現する女性、戦う女性、といった話の内部で語られる事項について、一方で、「女性神」の話を語るのは女性か、また、女性君主や女性戦士は現実に存在したのか、現実の世界における女性の地位と「女性神」の話の関係は、といった話の外部の事項についてもさまざまな指摘や質問があった。私はグリム童話 24 番で知られるドイツ語圏の「ホレさん」を考えていた。豊穣の女神、泉や井戸の女神、糸紡ぎをする女神、狩りの女神、生死の女神、と考えられたホレさんは、火とも関係があり、その姿には美しい女と醜い老婆という二面性が認められ、他文化圏の女神とつながる存在である。

今大会では、三浦佑之氏と渡邉浩司氏の両講演とこのシンポジウムを合わせ、日本、アイヌ、インド、中央ユーラシア、ヨーロッパの、神話や昔話の「女性神」がつながることをねらった。登壇者の切り口は異なるものの、その目標にいくらかでも近づくことができ、さらに追究すべきテーマがみえたことは収穫だったのではないかと思う。

事務局便り

〇2021 年度・2022 年度　新役員（◎は委員長、〇は運営理事）

会長	〇中川　裕（関東）		
事務局	〇藤井　倫明（東京）	〇柗村　裕子（関東）	〇間宮　史子（関東）
機関誌委員会	◎〇野村　典彦（東京）	〇大嶋　善孝（中部）	〇内藤　浩誉（関東）
	〇根岸　英之（関東）		

会報委員会　◎○菱川　晶子（中部）　○飯島　吉晴（東京）　○久保　華誉（東京）
○逵　志保（中部）　○花部　英雄（関東）
大会委員会　◎○高木　史人（近畿）　○加藤　耕義（東京）　○米屋　陽一（関東）
例会委員会　◎○小堀　光夫（関東）　○今井　秀和（東京）　○関根　綾子（東京）
○山田　嚴子（北海道・東北）　○山田　栄克（東京）
理事　川島　秀一（北海道・東北）　菊地　暁（近畿）　齊藤　純（近畿）
立石　憲利（中国・四国）　松田　精一郎（中国・四国）
難波　美和子（九州・沖縄）　西岡　敏（九州・沖縄）
監事　高塚　明恵（東京）　山崎　祐子（東京）
国際会議委員会　◎中川　裕（関東）　藤井　真湖（中部）　藤田　護（関東）

○会員の異動（敬称略・五十音順）

《新入会》岩瀬ひさみ（福岡）・奥濱幸子（沖縄）・沖田瑞穂（神奈川）・熊取谷さくら（大阪）・小山和行（東京）・園田美雪（鹿児島）・肖塵嫣（京都）・高畑吉男（東京）・瀧日千代美（岐阜）・長倉信佑（静岡）・廣木双葉（東京）・蒙古貞夫（東京）

《退会》　杉浦邦子（愛知）・井上さゆり（大阪）・斎藤みほ（東京）・細田明宏（東京）・渡部豊子（山形）

《逝去》　中野完二（東京）

《３年以上会費未納による退会》アハマド・ヒスブラー（東京）・阿部敏夫（北海道）・安藤昌平（東京）・井口淳子（大阪）・井上みよ（京都）・小坂晴彦（東京）・後藤若菜（千葉）・鈴木寛之（熊本）・千野明日香（埼玉）・田中華子（愛知）・多比羅拓（東京）・趙月梅（愛知）・原田遼（栃木）・村山絵美（東京）・柳生知華（広島）・矢崎春菜（北海道）

○受贈書籍（2021 年２月以降）

・ヘルマン・バウジンガー著、河野眞訳『口承文藝の理論　《民のうたごころ》の諸形式』あるむ　2021 年３月
・小澤俊夫先生卒寿記念論文集編集委員会編『昔話の研究と継承　小澤俊夫先生卒寿記念論文集』小澤昔ばなし研究所　2021 年３月
・人間文化研究機構『令和３（2021）年度国立歴史民俗博物館要覧』

○事務局が下記に移転しました

〒182-8525　東京都調布市緑ヶ丘１－25　白百合女子大学人間総合学部　間宮史子研究室
Tel：03-3326-5144（内線 1207）／ Fax: 03-3326-1319（児童文化研究センター）
E-mail: info@ko-sho.org

日本口承文芸学会を広くご紹介下さい

日本口承文芸学会への入会を希望なさる場合は、事務局にご連絡いただくか、学会ＨＰ（http://ko-sho.org/）から入会申込書をダウンロードして、ご記入のうえお送りください。
入会金なし、年会費 4000 円です。郵便振替口座　00180-4-44834 をご利用下さい。